

第一部 日本語教育実践研究 I

集中日本語Dクラスにおける実習報告（1）

呉 佩珣

1. はじめに

本稿では、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」において、筆者が行った会話の授業について報告と反省を記す。

2. 実習概要

実習授業・教員	2014年度2学期・集中日本語Dクラス・関崎博紀先生
使用教材	『Situational Functional Japanese Vol.2 Drills』（以下『SFJ』）
学生数	4名
担当授業	2学期のカリキュラムのうち、60分の授業を2回担当した ¹ 。 〈第1回〉1月6日 担当箇所：『SFJ』10課 Conversation Drills 4～6 〈第2回〉1月27日 担当箇所：『SFJ』12課 Conversation Drills 1～3 （以下CD）

3. 授業の流れ

- ① 既習項目の復習と確認：会話で使う文型を復習し確認した。
- ② 場面の提示：発話が行われそうな状況その状況を示す絵カードで提示した。
- ③ 会話の導入：会話の全てを一度に提示するのではなく、文脈に合わせ区切りながら導入した。
- ④ 新出表現の説明：Structures Drills（以下SD）で行われないもので、主に話し言葉でしか用いられない表現（「あのう」、確認の「～ですね」、「～んじゃないか」など）であった。
- ⑤ 会話の練習：学習者が日常生活でならない役は教師が発話し、練習を行った。
- ⑥ 教科書との結びつけ：当該の授業は教科書のどこに当たるのかを伝え、質問の有無を確認した。

4. 反省

4. 1 会話練習

会話の授業では相づちなどを含めた会話の展開の仕方を学習者に身に付けさせるため、ドリル練習が必要である。しかし、ドリル練習に留まらず、学習者がSDで習った文型を使い、実生活でコミュニケーションができるよう、自由会話²の練習も不可欠だと考える。担当したCDの授業はそれを念頭に置きながら行った。しかし、今回の授業でこのような自由会話の練習が十分にできたとは言えない。

4. 1. 1 練習における発話の動機

「～んじゃないかな」を用い、友人にアドバイスをするという会話で、自由会話の練習を行った他

¹ ただし、第1回の授業で説明が足りなかった文型については、翌週の授業において10分間補足を行った。

² 本稿でいう自由会話とは、その授業で学習した文型を用い、話題が自由に展開するような会話である。

は、ほとんどドリル練習であった。自由会話の練習としてはロールプレイなどが挙げられる。しかし、今回行った会話の内容は主に、店員にアドバイスを聞くものと道を尋ねるものであり、店員と道案内側の役は学習者が経験する可能性が低いと考えたため、片方の発話しか練習させなかった。従って、学習者に両側の発話が必要なロールプレイや学習者間での練習は、今回の授業では行わなかった。

学習者が教師を相手に行う会話も自由会話の練習として認められると考えていたが、教師と会話をしていると、モデル会話と全く一致した発話になり、ドリル練習のようになっていたことに気づいた。その原因は、学習者に発話の動機がないことにあると筆者は考えた。つまり、実現性に乏しい発話は発話意欲や動機を引き出すことができない。従って、学習者に新しい知識の形成を促すために、学習者の既有的知識や過去の経験に関連付けながら教えなければならない（峯 2013）。それに基づき、会話の練習を考える際に、言語知識と運用能力をどう繋げるか工夫をする必要がある。

4. 1. 2 練習における教師のコントロール性

今回の授業で自由会話の練習ができなかった原因として、教師の強いコントロール性が挙げられる。ドリル練習は学習者に自由度がないもので、そこから自由度が高くなる自由会話練習に至るまで、中間的なものを用い、段階的に移行すべきであった。教師からの指示に従って練習することに慣れている学習者に突然、自分で練習するよう指示しても、自由な会話練習に慣れていないため、困惑していたように見受けられたからである。練習を通してできるようになることを考えるだけでは足りず、うまく実行できるやり方、また練習が授業中の位置づけも考慮に入れるべきだ。学習者に徐々に自由度を与えつつある効果的な練習を考えなければならない。

4. 2 授業における段区切り

流暢でテンポの良い授業を行うにあたって、流れに沿いながら次の段階に移行するには明確な区切りも必要であることが分かった。第1回の授業では、できる限り繋がりのある授業をしようと考え、次の段階に移行するために、そこで導入する項目や表現を繋がりとして、前の段階の最後に持ち入れるというように授業を行った。しかし、活動の区切りが不明確になり、学習者は、教師の行っていること（説明、練習など）や、教室内の状況を理解できず、混乱してしまった。そのためか、授業が予定通りに進まなかった。そこで、第2回の授業では、授業の流れは第1回と同じだったが、「これから〇〇を勉強します」や「練習しましょう」といった発話で区切りを付けてみた。その結果、教師の説明と発話練習のキューとの混同がなくなった。

5. おわりに

今回の実習を通して、言語知識を実生活に即した言語運用に繋げるための練習を思案する難しさと、学習者を授業になじませる大変さを実感した。これらは今後の課題として取り組んで行きたい。

参考文献

峯布由紀（2013）「第二言語習得・言語教育からみた『タスク中心の教授法（TBLT）』—イントロダクション—」『第二言語としての日本語の習得研究』16号、pp. 5-15

集中日本語Dクラスにおける実習報告（2）

大石 茜

1. はじめに

本稿では、日本語教師養成課程の必修科目「日本語教育実践研究 I」において、筆者が行った4コマ漫画を使った作文教育の取り組みについて報告する。

2. 実習概要

実習期間	2014年度秋学期（2014年10月1日～2月6日） 作文の課題①11月10日、②12月22日、③1月26日
担当コース・指導教員	日本語予備教育コース・関崎博紀先生
学生数	4名
実習内容	初級の日本語学習者への作文教育。 既習の文型・語彙を使って、まとまった量の文章を書くための指導。

3. 実習内容

実習では、4コマ漫画を素材とし、ストーリーを書くという作文教育を試みた。作文教育を行ったのは、コースの主教材である Situational Functional Japanese がコミュニカティブアプローチによる会話中心のテキストであるため、書き言葉の習得を促すために、補足が必要だと考えたためである。また、素材として4コマ漫画を利用したのは、初級の学習者への作文教育は、既習の文型・語彙の習得状況を確認するものや、自分を主語とした日記や自己紹介の作文にとどまってしまうことが多く、また、自由作文では負担が大きすぎるという問題が指摘されているためである。さらに、中級、上級で求められる整ったレポートや難しい話題の作文ほど負担は大きくないものとしても、適切であると考えた。作文の課題は1ヶ月間隔で3回行い、添削し、授業でフィードバックをした。

3. 1 課題の作成

『文庫版対訳サザエさん』（講談社、2003年）の中から、既習の文型や語彙を用いて作文できそうな4コマ漫画を選び、プリントを作成した。日本語の原文の漫画では、未習の語彙や省略した表現が多く初級者には読解が難しいことと、原文で使われる日本語のもつ、学習者の使用語彙への影響力を考慮し、英語版を用いることにした。

3. 2 課題の内容

4コマ漫画のストーリーを、自らの想像力で補いながら、説明する作文を書く課題とした。宿題として持ち帰って書いてもらい、後日回収した。他の学生とは相談せずに自分で考えて書くこと、辞書の使用は可、テキストの使用は不可というルールを決めた。課題を渡す際に、4コマ漫画のストーリーの概要が理解できているか、英語で確認をとった。

3. 3 課題の添削・フィードバック

添削は、①既習文型・語彙の間違い②未習の文法・語彙の間違い③より相応しい表現の言い換え④よいところ、の4項目で色分けして書き込んだ。①既習文型・語彙の間違いの中から、典型的な間違いや皆にフィードバックすべきだと思われた間違いには、印だけつけ、正答を書き込まず、別紙のプリントを用意した。プリントには、間違った文を印刷し、授業の中で、クラスの皆で正答を考える取り組みにした。添削したコメントの分からない部分は、返却時に質問してもらい、補足した。

3. 4 フォローアップのアンケート・インタビュー

課題にかかった時間、難易度、辞書の使用回数のアンケートを課題と一緒に渡した。フィードバック後に、アンケートをもとに簡単なインタビューを実施し、より適切な課題の選定のための参考資料とした。

4. 考察

4人の学習者は、3回の作文を通して、所要時間や辞書を使用する回数が減った。しかし、文字数は減少傾向ではなかったことを踏まえると、作文を書くこと自体への負担は次第に減っていったと思われる。ただし、各作文課題の間は1ヶ月あいており、その間に日本語能力も上がっているはずである。この作文課題の効果なのかどうかは判断できない。

添削してみると、既習の文型・語彙の使いやすさ、使いにくさがあったことに気が付いた。また、フォローアップインタビューから、課題に選ぶ漫画によって、ストーリーのイメージのしやすさにはらつきがあり、作文自体の書きやすさ、書きにくさがあったことがわかった。既習事項の修得確認のための課題なのか、ある程度自由に長い作文を書くことを目的とするのかによって、適切な題材は変わってくる。

5. おわりに

既習の日本語に合わせた、学習者が書きやすそうな4コマ漫画を探すのは、思っていたよりも手間がかかった。漫画など様々な素材を授業で使ってみたいと思うが、学習者に合わせた教材として活用するためには、教師の工夫や手間が必要不可欠であると思った。

添削する際には、自然な日本語の表現へとどの程度修正を促すべきか迷った。取り組んでもらった作文を、いかに効果的なフィードバックへと繋げ、学習者にとってのメリット増やせるのか、今後の課題である。

今回はピアでのフィードバックは設けなかったが、返却されるとお互いに、他の学習者の作文を読んだり、楽しそうに会話をする姿も見られた。負担に感じがちな作文に、楽しく取り組む1つの試みとしては、良かったと思う。

集中日本語 A クラスにおける実習報告

Fukushi Jaqueline

1. はじめに

本稿は 2014 年度秋学期に筑波大学の留学生センターが提供する「集中日本語 A」クラスの授業において筆者が授業を観察する中で記録したことや、教科書の『Situational Functional Japanese Drills and Notes』を用いて実際に指導したことを中心に報告する。授業は 2014 年 10 月から 2015 年 2 月まで全 14 回行われた。またその中で、2014 年 11 月 19 日と 12 月 3 日に 2 回、実習を行った。

2. 実習概要

担当教員	酒井たか子先生
受講者数	6 名
実習期間	2014 年 10 月～2015 年 2 月 計 14 回
クラスの概況	集中日本語 A クラス 初・中級
授業の目標	SFJ Vol.1～3 の学習内容において理解するだけでなく、実際に使えるようにすること
使用教材	Situational Functional Japanese Vol.1～3

3. 授業の内容

14 回の授業の中で 2 回受講者に指導することができた。その詳細は表 2 に示す。

表 2 実習内容

	第 1 回目 (2014. 11. 19)	第 2 回目 (2014. 12. 3)
実習内容	『SFJ Vol. III』・第 17 課・導入・タスク	『SFJ Vol. III』・第 19 課・タスク
中心となる学習	文法 <question word+でも>	会話 <家族についての話をする>
使用時間	20 分	20 分
学習のゴール	<question word+でも>を使った表現が産出できるようになる	家族について自然なスモールトークができるようになる
授業内容	1) ウォーミングアップ、語彙の確認 2) ビデオを視聴する 3) 基本練習 4) 視覚情報を使用して練習行う 5) ペアで会話を行う	1) ウォーミングアップ (家族の話について) 2) 視覚情報を使って練習する 3) ペアで練習を行う 4) ペアで話したことを発表する

4. 反省点

4. 1 実習の反省

私はこれまで教えた経験がなかった。大変緊張し、カードを持っていた手が震えるほどだった。受講者も筆者の緊張に気づき、不安な気持ちにさせてしまった。教案を作った際の時間が実習では予定

通りにいかず、15 分の授業の予定が 23 分になってしまった。教案に書いてあることだけではなく、授業の中で予定外の質問などが出ると、それを使って様々なことを説明する時間が必要になった。また、実習後に、受講者から、活動をより良いものにするにはもっと時間が必要だったと指摘を受けた。

実習 1 では、活動の目的は学習者が「～でもいい」が言えるようにするものであったが、受講者の何人かは無理に「～でもいい」を使わせたとこもあり、少し強引であったと反省した。しかし、一方で受講者が「～でもいい」の使い方を無理矢理でも理解できるようにするのがいいのか難しいところである。実習 2 では会話の授業の際、いきなり会話練習に入ってしまう、学習者が何をすればいいか理解できなかったようだった。ポイントとなる表現をいくつかに絞り、使わせるようにするとよかったと反省している。例えば、モデル会話を見せることが考えられる。いきなり、ペアで「家族について話してください」という指示では、学習者は混乱してしまう。また、「ご家族は」、「～んです」など求めていた表現があまり出なかったのも残念である。

学習者からの事後のアンケートでは、「日常生活の状態を使って、練習するようにしたらいいと思います。」や「クラスで皆さんは順番に自分の家族の話を発表したらいいんじゃないかと思います。」、「問題を説明することについてあまりはつきりではなかった。」というフィードバックを受けた。

4. 2 オリジナル教材作成の反省

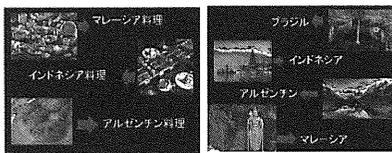


図 1 実習 1 のオリジナル教材



図 2 実習 2 のオリジナル教材

この 2 回の実習では、オリジナル教材を作ったが、教材作成に非常に時間がかかることが分かった。また、それが授業にふさわしいか細かいところまで考える必要があった。その教材にどのような意味があるか、学習者は何ができるようになるか、などをていねいに考察するべきだと反省した。筆者は絵やアニメーションなどを言語授業で使うのは効果的であると考え、パワーポイントにはいくつかの写真や絵をとり入れた。図 1 と図 2 は作成した教材の例だが、作っていた時に考慮したことは、受講者に馴染みがあるものを使うこと、参加する気を出させること、また知っている語彙かどうか確認することであった。また、写真や絵を選ぶ際には他の意味を持っていないか、また他に解釈できないかなども留意した。

5. おわりに

今まで学習者の立場からずっと教師のやり方を見てきた筆者が、実際に教案の準備、オリジナル教材の作成を通し、現場で指導を行うことは思ったよりずっと大変であることが分かった。対象言語の知識を持っているから教えられるのではなく、簡単に見える絵・文字カードを準備することからも工夫が求められる。授業見学では日本語教育に関して多くのことを学んだが、実際に教壇に立って意識していたことや簡単なことでさえも失敗してしまう可能性がある。この教育実習で最も重要であると自覚したことは、日本語の能力だけではなく、教えるためには、経験が必要であるということだ。

初級日本語 J200 における実習報告

呉 逸馨

1. はじめに

日本語教育現場における実践力をつけるために、筆者は国際地域研究専攻の日本語教育研究コースの一員として、筑波大学留学生センターの日本語補講「初級日本語 J200」で教育実習を行った。本稿は 2014 年度 2 学期に行った J200 の実習についての詳細を報告する。まず、J200 の授業概要、実習内容について紹介してから、教育実習から得た反省点および感想について述べる。

2. 授業概要

授業担当教員	許明子先生
実習クラス	筑波大学留学生センター 日本語初級 J200-1 クラス
授業期間	2014 年 2 学期 1 回 75 分授業×1 週間 5 回×15 週間 (計 75 回)
使用テキスト	SFJ 9 課～16 課 わくわく文法リスニング
授業目標	日常生活における具体的な場面で、日本語によるコミュニケーションができること
学習者	34 名 多国籍

3. 実習内容

3. 1 NWQ について

NWQ(New Words Quiz)は各課の新出語彙の予習状況と導入した新出語彙の意味の理解を確認するために設けられたテストで、課のはじめに、VC (Vocabulary Check) と新出語彙を導入し、意味を確認した後に実施されている。今回の実習で筆者は 15 課、16 課の NWQ の作成を担当した。ここからは 15 課を中心に、テストの作成、実施と採点、および反省点についてまとめる。

まず、テストの実施時間とテストの内容を重視したうえで、NWQ を作成した。

テストを作成する前の手順として、目標を立てる、語彙の選択、問題試案の作成・検討、問題の編集・修正、印刷・確認などが必要とされる。5 分程度の NWQ を作成するために、教育経験を持たない筆者には、多くの時間と努力が必要であった。15 課の前に 14 課の NWQ の作成を試みたが、作成が間に合わなかったため、実施することができなかった。その経験を生かし、15 課では二週間前から問題作成を開始し、時間に余裕を持って取り組むよう心がけた。

テストを作成するために、三つの点について工夫した。第一に、今までの 9～14 課のテストを参考に分析を行った。学習者は NWQ で概ね高い点数が取れていたことから、NWQ は学習のモチベーションをあげられるテストであると考えた。そのため、テストの分析から、新出語彙以外の文法項目による負担を減らすために、動詞に英訳を付ける、読み方を付ける、語彙の活用をさせない、難しい文法に触れないなどの工夫を施した。第二に、運用につながる語彙の選定について工夫した。より自然な文を作るために、日本語母語話者に確認したり、コーパスを用いて使用傾向を見たりするなどの努力をした。第三に、テストの面白みを増すために、図を利用した。

次に、学習者の問題点を予測したうえで、NWQ を実施した。

J200-1 クラスには毎回 30 名程度の学生が出席するので、多人数クラスになっており、コースの運営が非常に難しくなる。円滑に実施できるように、実施の流れである「問題用紙の配布、回答させる、模範解答を配る、答え合わせ、質疑応答」を何回もリハーサルした。特に筆者にとって困難であった

質疑応答の部分については、事前に学習者の問題点を予測したうえで、準備を行った。

最後に、NWQ の反省点について述べる。15 課の NWQ は従来のもものと比較すると、得点の平均値が低く、難易度を上手に調整できていなかったことが分かった。また、日本語教師としていかにして自然な文を作るのか苦勞したので、日本語能力をもっと上達させるべきだと痛感した。

3. 2 教壇実習について

筆者は 16 課一回目の授業を担当した、授業の流れは J200 コースのスケジュールにしたがい、① VC (Vocabulary Check) の宿題のチェック、②新出語彙の導入、③NWQ、④新出文法項目の導入という順番で進めた。教壇実習について、準備段階、実施段階およびフィードバック段階に分けて紹介する。

まず、準備段階においては、授業運営の観察や教案の作成などを行った。特に授業運営について理解できるように、授業をよく観察し、google ドキュメントで実習担当教員と授業内容やコース運営について共有していた。

次に、実施段階においては、実習担当教員と学習者の協力のおかげで、あまり緊張せず、授業を楽しみながら教えることができた。

最後に、授業で録画したビデオを利用し、教壇実習を振り返った。以下に、反省点を簡単にまとめる。

- ・ ひらがなの書き順を間違えた。些細なミスに見えるが、実際に学習者に悪い影響を与える可能性がある。
- ・ 絵カードを示す時に学習者全員に見えるような配慮ができなかった。
- ・ 授業の進行中に立ち位置に変化がなく、特定の学生に向かって発話する傾向が見られた。
- ・ 学習者の質問に対して分かりやすい説明ができなかった。(授業担当教員にサポートをしていただいた)

上記の問題点を振り返ることは、教師としての成長につながると思う。また、教師という立場である以上、学習者に答えだけを与えるのではなく、些細なことでもしっかりと確認した上で、正確に伝えられるように努力すべきだと気づかされた。

4. 実習の反省と感想

今回の教育実習を通して、日本語教師の仕事内容の一部を体験することができた。

まず、日本語教師の仕事と言えば、教壇に立ち、授業で教えるだけではないことを実感した。1 コマの授業を行うためには、授業の事前準備（教案の作成、テストの作成、他の授業担当教員との情報共有など）、授業中（出席確認、メディア設備の調整など）、授業後（採点、授業報告など）のそれぞれに、様々な作業を行う必要がある。次に、初級レベルの総合クラスでは、他の教師と協力し合う、チームワークが大事であることを痛感した。些細なことだが、他の先生に迷惑をかけないように、借りた教具などを直ちに元の場所に返却することや、教育現場で問題が生じた場合に、他の担当者と問題を共有し、皆で乗り越える必要性を感じた。

私は実習前は全く教育経験がなく、教師として大変未熟であった。しかし、教育現場において経験を積むことにより、学生に向けて自信を持って教えられるようになってきており、自身の成長を感じることができた。

ここで改めて、今回の実習において、ご指導を賜った許明子先生に心より感謝いたします。

中級入門日本語読む書く J470 クラスにおける実習報告（1）

胡 盼盼

1. はじめに

本稿では、2014 年度秋学期に日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」で行った日本語教育実習について、授業見学および実践において学んだ点と反省点を中心に報告する。

2. 実習の概要

今学期、木戸先生の指導の下で、筑波大学留学生センター「中級入門日本語読む書く J470 クラス」において実習を行なった。毎週、月曜日の 1 時限目に授業見学を行い、テーマ 6「スピーチスタイル」で 2 つのクラスを担当した。また、毎回の授業内容と感想をブログに記入し、記録したブログの内容に基づいて、毎週ミーティングを行った。

3. クラスの概要

実習期間	2014 年 10 月 2 日～2015 年 2 月 5 日 (15 週)
授業担当教員	木戸光子先生、小野寺志津先生
担当クラス	中級入門日本語読む書く J470-1B・月曜、水曜、金曜 1 時限 中級入門日本語読む書く J470-2B・月曜、水曜、金曜 3 時限
授業目標	大学での生活・勉学のために必要な日本語を習得させる。初級のクラスで学んだ日本語の読む・書く・文法についての運用力を向上させる。また、中級日本語の文法や語彙などを学んで運用できるようにさせる。
教科書	プリント教材
参考書	文法教科書『短期集中初級日本語文法総まとめ ポイント 20』（友松悦子・和栗雅子、スリーエーネットワーク、2004）
学習者	1 時限目 15 名程度、3 時限目 5 名程度

4. 授業について

4. 1 授業前の準備

授業前に、文法研究を中心にして教材研究を行ったうえで教案を作成した。これまで、教育の経験がなかったため、準備段階から問題を抱えており、事前に充分なりハーサルを実施した。特に印象に残ったことは以下の通りである。

同じ日に、J470-1B と J470-2B の 2 クラスでテーマ 6「スピーチスタイル」の授業を担当するため、クラスの数やレベルを配慮し、多少ボリュームがある内容設定を行い、2 つの授業で類似した教案を作成した。しかし、事前の授業見学の際に、担当する 2 クラスの進捗状況に差があることを知った。そのため、クラス別に教案を作り直した。

4. 2 授業実施

今回の実習では、板書のしかた、時間配分、タスクなどの面を工夫して授業を実施した。

まず、板書の書き方については、木戸先生の書き方を参考にして、授業開始時に、その授業の流れをホワイトボードの左側に記入した。縦線を引くことで授業時の板書との区別が出来るようにした。板書は、学習者が覚えるべきことなど、重要なポイントを記入するため分かりやすく書くように工夫する必要がある。今回の実習では、表を用いて説明する内容があったため、表の書き方や表を書くタイミングにも注意を払った。

また、時間の配分に関しては、1 コマが 75 分しかないため、授業内に全体の前で説明したほうが良い内容と個別に対応したほうが良い内容とを判断しなければならなかった。毎週、3 時限目のクラスの実習生と一緒にミーティングをしてきたため、ある程度、両方のクラスにおける学習者の情報を把握できた。3 時限目のクラスは人数が少ないが、積極的に質問する学習者が多いため、質問応答の時間を多めに確保した。実際の授業でも予想通り、1 時限目よりも 3 時限目の方が多くの質問が挙げられた。それにより、授業の進度を調整し、1 時限目の授業の進捗と揃えることができた。

そして、タスクに関しては、教具を使ってみた。今回のテーマはスピーチスタイルであるため、話し相手によりスピーチスタイルが変わることを理解させるために身分シールを使用した。「先生・学生」「先輩・後輩」「クラスメート同士」などのような身分シールをペアごとに配り、ペア練習をさせた。練習が終わってから、ペアごとに発表してもらった。その後、発表者の内容を一言でまとめたり、聞き取りにくかった部分をフォローしたりして、発表者とのやり取りを心がけた。

4. 3 授業後の反省

授業の反省点や改善点を考えるために、学習者からのフィードバックとして、感想シートを利用した。1 時限目のクラスの学習者からは、教師が少し早口だというようなコメントをもらった。ティーチャートークにおいて、学習者に対しての影響があったと考えられる。そのため、できるだけ早口にならないように注意していたが、最初の授業では教案を見ながら授業を進めたため、スピードが速くなってしまった気がする。それを踏まえて、3 時限目のクラスでは、なるべく教案を見ずに、話のスピードをコントロールしながら、授業を進めるように工夫してみた。その結果、3 時限目のクラスの学習者からは、1 時限目のクラスのようなコメントが出なかった。

5. おわりに

今回の実習は、筆者が日本語教師として初めて実際にクラスで授業を行ったものである。今回の実習を通して、教師の役割や仕事の全般を知ることが出来た。この経験を日本語教育の中に生かしていきたいと思っている。最後に、実習期間を通して丁寧に指導くださった担当教員の木戸光子先生と、J470 の学習者の皆さんに対して感謝の意を伝えたい。

中級入門日本語読む書く J470 クラスにおける実習報告（2）

曹 瑩

1. はじめに

日本語教育研究コースでは、秋学期に日本語教育実践研究Ⅰの必修科目で、教育実習を留学生センターの授業を利用して行っている。本稿は実習の概要、内容及び実習感想、反省などの報告である。

2. 実習概要

担当教員	木戸光子先生(小野寺先生)
クラス曜時限	中級入門日本語読む書く J470-1A ・月水金 1時限 中級入門日本語読む書く J470-2A ・月水金 3時限
実習実施日	2014年1月26日(月)
受講生	J470-1A 14名 J470-2A 6名(実習日)
実習内容	文法チェック 30 テーマ9「人生」-資料

2014年秋学期から実習のために、日本語読む書く J470-2A の授業に毎週見学した。毎回の授業内容、感想とコメントを実習専用開設されたブログへ投稿する形で掲示し、同じ週の木曜日に実習会議で木戸先生からのコメント、指導をうけた。教案の提出、訂正からリハーサルまで、準備したうえで、第12回の授業で教壇に立ち、同じ日に1時限と3時限の2コマで実習を行った。

3. 実習内容

教案作成から教案修正、リハーサル、実習会議、小野寺先生の授業見学までの一連の準備を経て、予定どおりに1月26日に実習を行った。授業内容は文法チェック 30の説明と答え合わせ、テーマ9に関連するグループ活動と資料である。最後に資料の作者である柴田トヨさんのインタビュー映像を見せて、学習者に簡単なアンケートを依頼した。

4. 実習の感想と反省

4. 1 授業内

1) タスク

テーマ9資料の部分は柴田トヨの「電話」という詩である。詩の意味をより明確に伝えるために、絵カードの提示、ストーリーを作成するタスクを設定した。学習者の理解は早く、予定どおりに発表できた。タスクを通じて、資料の説明はうまく進んだ。詩の意味理解の点から成功したタスクだが、「読む・書く」の授業なので、タスクを利用してもっと語彙が増やせれば理想的である。

2) 語彙を増やす

1) で報告したように、「読む・書く」の授業では、いうまでもなく語彙を増やすことが最も大切

な課題である。この授業の通常授業では「言葉シート」の形でテーマごとに語彙量を増やすものがあり、学習者を観察していると、新出単語の例文を、辞書にあるものをそのまま写したり、学習者が、個々の知らない単語ではなく適当に5つ単語を選んだりした学習者がいたため、期待される効果が達成できなかったと言わざるをえない。新しいテーマの始まる前に、グループごとに一定量の新出単語を宿題にし、次回授業グループ間で交換することを提言したい。

3) ティーチャートーク

外国語の授業では普通学習者の発話が多く求められているが、今回実習の授業は「読む・書く」が中心であり、会話するより、むしろいかに説明したら伝わるかが課題であった。特に、文法の説明は肝心で、教案を準備する際は「文法表現」という部分があり、「にそって」と「によって」の区別の説明では文法的な意味からいろいろと説明するよりは、例文で示すほうが効率的である。この経験から学んだのは、たとえば「会話の授業ではティーチャートークを少なく、読む・書く授業では多くする」というのではなく、場合により柔軟性も欠かせないことである。

4. 2 授業外

1) 教案

よい授業をするには、教案が重要である。教案作成には、授業内容、教材研究、時間配分はもちろん、学習者のレベルを把握することと人数も考慮に入れるべきである。今回の実習で時間配分に予想がつかず、予定した内容の一部は未完成だった。これからは限られている時間をいかに使用するか、授業をいかに教案通りに進めるかについて工夫したい。

2) 見学

実習前、毎週の見学では授業の流れ、授業の進め方や学習者への質問応答などを見ることを通じて、教師という役割への理解が深まった。授業を順調に進めるには学習者を上手くコントロールすることが大切である。学習者をコントロールするというのは、ここでは単に授業の指示に従うことのみではなく、学習者の注意を引くことやグループ活動のフォローなども含まれている。残念なことに、実習のグループ活動ではうまくコントロールできなかった。グループ発表の時、発表グループが前に発表していたのに対して、前を見ず自分のものだけに集中した学習者がいた。特に1時限の多人数クラスだった。

3) リハーサル、二次授業と授業録画

リハーサルでは初回教案、教具準備の不足が分かった。それに、リハーサルも録画されたので、本番授業の緊張も感じられた。二回の授業と授業録画は授業改善に役に立った。1時限でグループ活動は一部のグループは内容理解に少しずれがあったが、3時限でその部分を強調することを通して改善できた。また、実習が終わり、授業録画で実習の全体的な様子が客観的な立場から見ることができ、録画で分かった今回実習の足りないところを2年次の教育実習で改善したい。

5. おわりに

実習で丁寧にご指導くださった木戸光子先生、見学させていただいた小野寺先生と J470 クラスの受講生に、心からお礼を申し上げます。

「上級日本語書く J850」における実習報告

駒居 幸

1. はじめに

本稿では、日本語教師養成プログラムの必修科目「日本語教育実践研究 I」において行った教育実習について報告を行う。報告者が実習を行ったのは、2014 年度秋学期に行われた「日本語補講コース J850A 書く」(指導教員：木戸光子先生)である。

2. 実習概要

授業の目的	3000 字程度の論理的なレポートが書ける。
教科書	『大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』アカデミック・ジャパン・リサーチ 会編、アルク、2002 年
授業概要	全 15 回 (個別指導含む)。参加学生は 10 名程度であった。 授業は主に以下の流れで進められた。 ① 要約作成：15 分間で新聞記事の内容を要約する。 ② 要約フィードバック：前回の授業で作成した要約文へのフィードバック ③ 作文フィードバック：事前に提出された宿題へのフィードバックする。 ④ グループワーク：グループ (2-4 名) に分かれて、③を互いに見せ合う。 ⑤ 教科書説明：次週の宿題となる教科書の課について、簡単に説明する。
実習概要	教科書の「第 10 課 列挙」を二週にわたって担当した。第一週は⑤教科書説明を、第二週は④作文フィードバックを行った。担当する課以外の授業では、資料準備などの授業補佐をしながら、授業を見学した。

3. 実習での取り組み 1：授業見学

本授業は宿題のフィードバック (FB) とグループワーク (GW) を中心に進められる予習型の授業であり、教科書の説明に裂かれる時間が少ない点に特徴があった。本項では、予習型授業を運営する上で重要と思われたことを中心に、授業見学をして分かったこと、見えてきたことについて述べる。

①早く授業を軌道に乗せることの重要性

本授業は、宿題の FB、宿題を元にした GW が中心となるため、宿題の提出抜きには授業の内容を身に着けることが難しい。こうした授業の大前提となる部分を共有していない学生がいると、スムーズな授業運営の妨げになる。そのため、本授業のような予習型の授業では、できるだけ早く学生が授業の流れに慣れるよう、授業の流れをホワイトボードに書く、manaba のログインの仕方をプリントに書くなどの工夫が必要である。

②分かりやすいフィードバックプリントの作成

本授業では受講生の書いた要約文、作文から、よく書けているものをピックアップして印刷し、フィードバック用プリントとして配布していた。プリントは、学生が理解しやすいよう、次の並びを基

本に作成された。1. 授業中に指示されたことをそのまま実行している（模範的な作文）2. 教科書の内容を応用して書いている（創意工夫が見られる、理想的な作文）3. 教科書の指示とは異なっているもの（教科書の内容には反しているがレポートとして十分に通用する例外的な作文）。また、取り上げられる学生に偏りがないように留意されていた。このように、学生の理解度・モチベーションに結び付くプリント作成が必要である。

③偏りのないグループ作り

GW をする上では、学生のキャラクターや国籍に偏りがないようにする配慮された。特に同じ国籍の学生が多いと、視点が固まってしまう上、母国語を用いて会話をする場面が出てきてしまうので注意する必要がある。報告者は三回、自分でも宿題を提出し、実際に GW に参加をしたが、学生との距離を縮め、それぞれのキャラクターを掴むのに役立った。

4. 実習での取り組み 2：教壇実習

本項では二週にわたって行った教壇実習について、指導教員および学生からの指摘を元に、反省点をまとめたい。

授業前、授業後に指導教員、学生から受けた指摘をまとめると以下の通りである。

- ①授業の流れを意識する（中心となるポイントを決め、ポイントが交差しないよう授業を進める）
- ②学生が目で確認できるように、配慮する（ホワイトボード、プリント等を活用）
- ③できるだけ具体的に説明する（新しい文型が出てきたら、実例を挙げながら説明する）
- ④授業に緩急をつける（ホワイトボードに書き込む、学生に手を挙げさせるなど）
- ⑤しっかりと間合いを取る
- ⑥少ししゃべるのが速い、堅い敬語を使いすぎない

筆者が日本語ネイティブ、且つ、専門が日本語教育ではないため、相手が「留学生である」ことへの意識不足に起因する指摘が多く見られた。①～④は、筆者が最初に作成した教案について、指導教員から受けた指摘である。①については、筆者が日本人の感覚で教案を作成しているため、文法面から見るとポイントが交差しており、学生が混乱するのではないかと指摘された。また、②③の指摘から、日本人であれば口頭の説明だけで理解できる部分も、留学生は一度で理解できない可能性があるため、視覚情報や具体例を用いるなどの工夫の必要性を痛感した。⑤⑥は授業後に指導教員、学生から受けた指摘である。自分ではゆっくりしゃべっているつもりでも、学生には速く聞こえる、丁寧に喋っているつもりが、逆に学生との距離感を生むなど、配慮の及ばない部分があった。

5. おわりに

本授業の見学を通して、基本的な授業運営から、教案作成、作文指導法、GW の運用法まで、授業を行う上での基本的な技術を見学・体験することができた。教壇実習においては J850 という日本語レベルの高い学生であるため、最初は、日本人を相手のつもりで教案を作っていた部分があり、留学生に分かりやすい、ロジカルで具体的な授業を行う必要性を痛感した。本授業の反省を生かして、実際の現場に立てるよう、研鑽に励みたい。

日本語初級漢字後期「漢字4」における実習報告

方 的 中

1. はじめに

本稿は、2014年度秋学期、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」において、筆者が筑波大学留学生センターで実施された短期留学生を対象とする初級後期の漢字クラス「漢字4」で行った教育実習について報告するものである。以下はその実習の概要と内容を説明し、筆者の反省と考察について述べる。

2. 授業の概要および実習の内容

表1 漢字4クラスの概要

担当コース	初級漢字後期「漢字4」クラス
担当教員	加納千恵子 先生
期間	平成26年度秋学期 金曜日2限 計15回
教科書	『Basic Kanji Book』vol.2 (凡人社) 第36～45課
受講者情報	漢字レベル：漢字4レベル（初級の漢字を300～350字ほど知り、漢字SPOTなどのプレースメントテストにより判定された） 日本語レベル：J200～J700レベル（SPOTなどのプレースメントテストにより判定された） 文化圏別：漢字圏（中国）2人、非漢字圏20人 総計：22人
授業目的	基本漢字500字程度の総合的な運用力をつける
評価方法	宿題の平均10%、クイズの平均20%、中間テスト30%、期末テスト40%

表2 実習の内容

教壇実習	2014年12月19日（金曜日）2時限（75分授業のうち60分）
担当内容	『Basic Kanji Book』vol.2 (凡人社) 第42課「大学生生活 University Life」
新出漢字	卒 論 実 調 必 要 類 得 失 礼
実習の流れ	3の「授業の流れ」の③～⑦
その他の実習	教壇実習以外に15週の授業に参加し、クラス担当教員の加納先生の教授法を見学し、学習者の宿題等をチェックする。必要な場合、学習者の練習相手になる。

3. 授業の流れ

復習の部分以外に、大抵、字形、読み、語彙、文作りという順番で授業が行われた。授業の流れは以下の通りである。

- ①前の課のクイズを実施する
- ②教師が実施したクイズをフィードバックする
- ③教師が新しい課の要点を説明する
- ④新しい課の内容を練習する：学習者は配られた「練習用紙」に教科書の新しい課の2-1漢字の書

き方、2-2 読み練習のⅠ、2-3 書き練習のⅠを書いた後で、2-3 書き練習のⅡの単語を使って文作り練習をする

- ⑤教師は学習者一人一人の練習状況を確認し、文作りを終えた学生に、自分の作った文をホワイトボードに書かせる（一人につき2文程度）
- ⑥学習者に教科書の2-2 読み練習のⅡの文、およびホワイトボードに書かれた学習者の作った文を読ませる
- ⑦学習者はペアになって、配られた読み練習用紙に載せてある15-20文程度の文を交互に読み、互いに読み方の正誤を確認する（練習用紙のA、B両面には、それぞれ一行おきに漢字語の正しい読み方を付けてある）
- ⑧時間があれば、学習者に教科書のユニット3の読み物を読ませる
- ⑨学習者に宿題用紙を配り、次回の授業で提出させる

4. 実習の要点

漢字4クラスの学習者は、たいいてい漢字学習の経験を持っているので、字形、読み、語彙の指導は基本的に学習者が中心となって行い、教師はチェックや注意点に関する説明をするという補助的な役割を果たしていた。したがって、授業の中心は、漢字の字形認識や読み書きという初歩的な段階から、漢字語彙の意味用法や文脈把握へ移ることになった。以上のクラスの特性を踏まえて、筆者は「文脈化指導」を教壇実習の要点とした。毎週の授業観察と一回の教壇実習を通じて、漢字語彙クラスにおける「文脈化指導」とは、具体的に、1) エピソード記憶を活かす、2) 大量の例文を呈示する、3) やさしい日本語で説明する、4) 類義語と比較する、5) 媒介語を利用する、という5つの方法があることが分かった。

特に、筆者が担当した『第42課』のテーマは「大学生生活」についてであったため、「卒業」、「実習」、「調査」などの学習者の実生活と関わりのある語彙には、1) のエピソード記憶を活かすという方法を取り、指導を行った。他の語彙についても、そのストーリー性や抽象度を考慮し、その意味用法の特質に相応しい説明方法を採用した。以上の方法を応用することによって、学習者に「だれがいつ何をどのようにする」という文脈情報を与えることができたと思われる。詳細な分析は、本論文集の第3部に掲載されている「日本語の漢字語彙教育における文脈化指導の方法」を参照されたい。

5. おわりに

今回の漢字クラスの実習は、筆者にとって初めての日本国内における教授経験であった。反省点として主に以下の3つがある。

まず、読み練習の時間配分が不足していた点である。学習者に繰り返して読み練習をさせることによって、漢字の字形と読みの対応や、漢字語彙を使う文脈をしっかりと頭のなかに定着させることができるが、今回は十分な練習時間を確保できなかった。

また、学習者の不明点を全クラスに説明していなかったことも反省したい。他の学生がその問題について考えていなくても、説明を聞いてより一層理解を深めることができるので、今後、学習者から質問が出た場合にはクラス全員の情報共有を常に心掛けるべきである。

最後は、学習者とのインターアクションが不十分だった点である。学習者が説明を理解したり、新出項目を練習したりする時間も必要であるが、教師としては常に学習者の様子を見ながら指導を進めることが求められている。それはある程度の経験を積んでから初めて出来ることかもしれないが、これからその方向に向かって努力すべきであろう。

中級漢字中期 K600-1 クラスにおける実習報告

Sagung Diah Nagisa Utari

1. はじめに

筆者は「中級漢字中期 K600-1」(以下、K6 クラス)で実習を行った。実習では、担当教員の加納千恵子先生の下で一学期を通して、授業全体の見学をするだけでなく、宿題・クイズ・テストのチェックや、実際の教壇実習も行った。本稿では、実習の際に学んだことや反省したことについて報告する。

2. 実習の概要

K6 クラスとは、初中級から中級レベルまでの漢字を 600 字程度知っている学習者に、中級漢字 100 字程度のさらなる学習を通じて、総合的な漢字語彙の運用力をつけるための授業である。K6 クラスの学習者は全 9 名で国籍が多様(漢字系学習者 2 名と非漢字系学習者 7 名)であった。K6 クラスでは、『INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol.1 (以下『IKB1』)をテキストとして使用し、その中の第 6 課から 10 課までを授業の内容としていた。1 つの課につき 2~3 コマが設けられており、各課では、主に 3 つの段階に分けて教えられていた。第 1 段階では、新しい漢字語彙、あるいは前週の復習から導入し、『IKB1』の「基本練習」を中心に練習した。第 2 段階では、『IKB1』の「応用練習」を学習者に完成させ、そのフィードバックにより漢字語彙の知識を強化した。また、その課で練習した漢字及び漢字語彙の読みをペアで練習し、定着させた。第 3 段階では、その課の習得状況を測るために、10~20 分程度のクイズを行い、その後に『IKB1』に準拠している宿題を中心に解説しながら、学習者が漢字及び漢字語彙の知識を運用できるように定着させた。また、時間がある場合、クイズのフィードバックも行った。

3. 実習で学んだこと及び反省したこと

3. 1 授業見学

授業見学で特に筆者が目にしたのは、授業中で行われる板書活動と漢字語彙の導入の 2 つであった。K6 クラスでの主な板書内容は、漢字語彙の意味を説明するために使用するコロケーションや、練習の解答、あるいは解答に含まれている漢字を使った他の語彙や文などであった。学習者に練習の解答を板書させることによって、文字の字体・字形・筆順などの間違いや、学習者が正しく漢字語彙を運用できるかどうかを確認することができる。さらに、板書することで学習者が自己の間違いに気づいて訂正し、自己モニター力のトレーニングにもつながることがある。

漢字語彙を導入するために、その語彙のコロケーションや反義語などを使用した。例えば、10 課に出てくる「到達」と「達成」の違いについて、「到達」の場合は「収入が 1 億に到達する」、「達成」の場合は「売り上げ目標を達成する」という例を挙げ、その違いは使われる助詞(「に」と「を」)にあると説明した。また、「短所」の意味を説明する際、その反義語の「長所」を挙げた。漢字語彙は、ただ単にその意味や例文を言うのではなく、その語彙を使った反義語などを示すことで、その語の用法がより理解しやすくなると考えられる。

3. 2 クイズ・テスト

クイズ・テストの結果から見ると、漢字の読み方による間違いが最も多くみられた。例えば、「清濁音」の間違いには、「なとく（納得）」を「などく」、「ぞうとう（贈答）」を「そうとう」などがあり、「長短音」の間違いには、「とざん（登山）」と「とうざん」、「そしき（組織）」を「そうしき」などが多くみられた。読み方以外にも、「著」と「署」のような字形の間違いや、「撃（う）つ」と「打（う）つ」のような使い分けに関する間違いもみられた。また、このような誤用は、非漢字圏学習者よりも、漢字圏学習者に多く見られることも分かった。したがって、漢字を教える際には、漢字の意味や用法を定着させることも重要であるが、漢字の読み方や字形などの細かいところにも配慮する必要がある。また、一見有利だと思われる漢字圏学習者であるが、彼らのほうがそのような間違いをしやすいため、漢字語彙を導入するには十分に気を付ける必要があると考えられる。

3. 3 教壇実習

筆者は1回の授業で教壇実習を行った。担当した授業内容は、『IKB1』の第8課「漢字の音訓」の「応用練習」であった。

本実習の反省点としては、教えることにまだ慣れていないということもあったが、教案に詳しく漢字語彙やその説明や例文を記述したものを、最終的にはうまく活用できなかったことである。また、想定外のことが起こった場合、特に、学習者からの質問があった時、それにどう対応すればよいのかを瞬時に判断することができなかったことである。例えば、「集い」の用法を「若人の集い」と「若者の集まり」で説明したが、「では、60歳の集いはどうですか」と聞かれたが、筆者はその質問の意味を把握できず、学習者を逆に混乱させてしまったことがあった。そこで、教案を作成する段階で、授業の内容をどのように教えたら学習者に理解されるかを考えることも重要であるが、授業をよりスムーズに進めるためには、学習者から質問が出る、あるいは間違えると思う部分をあらゆる方面から予測し、事前にそれにどう対応するかを考えておく必要がある。

また、授業では漢字語彙の例を板書することがあったが、その際に筆者は自身が書いた文字の間違いに気づかず、教師に指摘されてわかったことがあった。具体的には、「台湾」の「湾」の「弓」の部分で「己」と書いたが、その間違いに気づけなかったことである。このように、教師、特に非漢字圏の教師は、自分が書いた文字が正しいかどうか特に注意する必要があると思う。

4. まとめ

実習を通して、事前に準備する教案がどれ程重要であるかがわかるようになった。特に筆者のような教える経験が浅い者には、授業で教える内容や説明する方法だけでなく、学習者がどのような質問をするか、学習者がどのような部分に混乱を感じているかを想定し、それにどう対応するかを教案に細かく書いておく必要があると思う。今後は今回の実習で学んだことや反省したことをいかして、効果的な授業を実践していきたい。

日本語中級「漢字 6」クラスにおける実習報告

馬 文甜

1. はじめに

筑波大学大学院人文社会科学研究所の日本語教師養成プログラムを履修するにあたって、留学生センターで日本語教育実習をすることになった。そこで、2014 年度秋学期、短期留学生向けの総合日本語コースの漢字 6（加納千恵子先生担当）のクラスで見学しながら、教案を作り、実際教壇に上がって一コマを担当した。本稿では、実習した授業の内容と反省点、及び授業見学で考えたことについて報告する。

2. クラス概要と実習概要

漢字 6 のクラスの概要は以下の通りである。

- ① 目標と内容：初中級～中級レベルの学生に、中級漢字 100 字程度の学習を通じて、総合的な漢言語彙の運用力をつける。そして、学習者自身が漢字及び漢言語彙を選び、正確に運用できるようにするための方法を工夫できるようにする¹。
- ② 教材：『Intermediate Kanji Book』Vol.1 の 6 課～10 課
- ③ 評価方法：宿題の平均 10%、クイズの平均 30%、期末テスト 60%
- ④ 日程：毎週金曜日 3 限、期末テストを含め、15 回の授業が行われた
- ⑤ 学習者：6 名（漢字圏学習者 2 名、非漢字圏学習者 4 名）

実習概要は以下の通りである。

- ① 授業を見学し、授業の流れや指導方法を把握する。
- ② 学生の出席確認、宿題とクイズのチェック及び採点、ペア練習の際に読みの指導に取り組んだ。
- ③ 第 8 課の後半部分を教えるため、教案を作成し、一コマの授業の中の 60 分を担当した。

3. 実習授業

筆者が担当した授業の概要と流れは以下の通りである。

- ① 日付：2014 年 12 月 5 日（金）
- ② 場所：筑波大学留学生センター 研修室 H
- ③ 時間：12：15～13：15
- ④ 学習内容：『Intermediate Kanji Book』Vol.1 第 8 課基本練習Ⅲ及び応用練習
- ⑤ 新出漢字：絵、怒、抱、頼、捕、占、著、汚、優、盛、傷、象、去、精、神、希、望、素、歳、役（20 個）
- ⑥ 授業の流れ

¹ 授業初日に配布したシラバスへの参照

時間	指導項目	活動内容
12:15～12:25	基本練習Ⅲ	自己紹介、簡単な復習、基本練習Ⅲの答え合わせ
12:25～12:40	応用練習Ⅰ	一人二題ずつ読ませてから、語彙の用法を説明し、答え合わせ
12:40～13:00	応用練習Ⅱ	漢字を黒板に書かせて、字形をチェックしながら、答え合わせ
13:00～13:15	応用練習Ⅲ	一人一題ずつ読ませてから、語彙を説明し、答え合わせ

4. 実習授業の反省点と感想

実習授業の反省点について述べる。まず、時間配分のことである。一時間の授業を行う予定だったが、緊張していたせいで、話すスピードが早くなり、結局45分で授業を終えた。時間を見ながら、途中でスピードを調整したり、補足する内容を用意したりする必要があった。今回、加納先生はフィードバックや補足説明をしてくださり、問題はなかったが、今度一人で授業を行う場合は、授業の内容を多めに準備する必要がある。また、問題ごとに学習者を当てて黒板に書いてもらうことにすると、当たっていない学習者は、することがなく携帯電話で遊んだりする可能性が出てくる。加納先生のアドバイスを受け、全ての学習者に問題の解答を一気に黒板に書いてもらうことに変更した。このように、当てた学習者だけではなく、クラスにいるほかの学習者のことも考慮しなければならない。教師として、授業中に学習者の待ち時間を減らすため、授業の流れを工夫する必要がある。また、最も反省すべきところは、学習者とのインタラクションが少なかったことである。中級レベルの学習者に対し、一方的に説明するのではなく、適宜質問をすることが大切である。学習者とのインタラクションにより、学習効果を高め、時間の調整もできる。最後に、先生のコメントによると、緊張していたにもかかわらず落ち着いているように見えたことが良かったところである。

今回の教育実習で一番感じたことは、普段わかっていることでも、教壇に上がると、突然自信がなくなり上手く説明できないことがあることである。そこで、ノンネイティブ日本語教師としては、常に自分に対して「本当に分かるか。分かりやすく説明ができるか」と問い続ける必要があると思われる。また、筆者は漢字圏の出身であるが、だからといって、漢字に関する指導に必ずしも有利な状況にいるとは限らない。中国語の漢字と日本語の漢字は似たものが多いが、かえって微妙な違いや学習者の細かな間違いに気づくのが難しい。中国語を母語としている学習者は、漢字語彙の学習を怠けているケースが少なくない。初級レベルにおいて有利な中国人学習者は、中級レベルになったら、非漢字圏の学習者に追い越されていることが多々ある。実際、今回実習したクラスの中では、非漢字圏の学習者のほうが漢字圏の学習者より、語彙の読み方や用法に関する知識量が多いと感じられた。

5. おわりに

今学期の実習を通じて、日本語教育現場の様子を近いところで観察し、実際に教えることを経験した。以前は、学生として教室に臨んでいたが、今回の実習では教師の立場から教育活動を考える貴重な機会になった。最後に、実習期間を通して丁寧にご指導くださった加納千恵子先生に感謝の意を表したい。

上級漢字クラス「漢字 8」における実習報告

馬 健

1. はじめに

本稿では、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究 I」で、「漢字 8」クラスにおいて、筆者が行った『Intermediate Kanji Book Vol. 2』第 14 課の練習 3～練習 8 の指導における取り組みについて報告する。

2. 実習概要

期間	2014 年度秋学期
担当クラス	漢字 8
学習者	漢字圏上級日本語学習者 9 名 (2 名欠席)
使用教材	『Intermediate Kanji Book Vol. 2』
指導教員	加納千恵子先生

3. 授業の内容

『Intermediate Kanji Book Vol. 2』第 14 課の練習 3～練習 8 について、学習者に回答を白板に書いてもらい、解釈を加えながら、目標漢字用語の読み、書き、意味、用法などを記憶強化することを目的として 60 分の授業を行った。

4. 授業の反省・考察

4. 1 教師の振舞い方

今回の授業では、筆者は 50 分以上座ったまま授業を進めた。筆者の考えとしては、自分の身長が高いため、立てば学習者に白板が見えにくくなることや、自分にとって教案/テキストの内容が見えにくくなるなどという理由があった。しかし、座ったまま授業をすることが、学習者にどのような印象を与えるのかについて、配慮すべきであった。特に、白板を指してなんらかの学習項目を説明するとき、座ったまま椅子ごと移動しながら指導を行ったことは非常に違和感があり、「偉そう」な印象も残ったかもしれない。また、筆者と同じ国籍の学習者が多く、普段も彼らとの接触が多いため、両者ともに「別に違和感はない」と感じられたかもしれないが、他の国の学習者や接触の少ない学習者もいたため、教師としての振舞い方については改めて見直さなければならないだろう。確かに、立つことによって、邪魔になったり、教案が見えにくくなったりするかもしれないが、学習者に見せたい内容を隠さないように、少し横にずれて立つ、事前に教案やテキストを熟読するなどを工夫すれば、改善できると思われる。

4. 2 指示及び板書

授業の最初に、練習問題の番号を白板に書き、学習者に回答を書いてももらった。普段、指導教員のやり方をかえりみると、学習者に「書ける場所がない」などの迷惑をかけないように、一人が担当する部分をすべて一列にしていたことが分かった。しかし、筆者は練習 6 と練習 7 を上下に並べたため、練習 6 を担当する学習者が書いている間、練習 7 を担当する人が「立つ場所がないので書けない」と困っている様子が見られた。また、分担させた内容量のバランスが悪かったためか、書き終わっていない人を待つ時間も長くなってしまい、予定より時間が大幅に超過してしまった。

次に、学習者の誤用訂正や言葉の説明などを目的として、教案予定外に白板を利用して板書した。しかし、何をどこに書いたら良いのか、どのような速度で書いたら良いのかが分からず、結局板書があちこちになり、全体的に見た目も悪くなった。そのため、強調したかった項目も学習者によく伝わらなかったこともある。例えば、「物」という漢字の二つの読み方「ぶつ」と「もの」を教えるために、白板の右上に書いたが、字が汚かったためか、印象に残りにくかったと思われる。そして、クイズの結果をみると、「食物」を「しょくぶつ」と書き間違えた人も何人いた。

以上のことから、教師の指示は、教師の立場でどのように教えやすいか、どのように効果があるかについて考えるのみではなく、学習者の立場から、指示がうまく伝わるか、学習者がうまく指示通り実行できるかなどについても考えなければならない。また、教師の板書は、覚えさせたい、強調したい項目をうまく学習者に伝えるため、適当な場所に、きれいに、丁寧に書くことが必要となる。

4. 3 漢語の類義語の説明

練習問題5は、二字漢字熟語の意味を理解させることを目的とし、意味が類似している4つの言葉の中から、適切な語を選び、空欄に入れるという問題であった。筆者は準備段階で、各語の意味を把握するために、辞書で調べ、その語の意味に関連するキーワードを教案に書いた。しかし、手元にあった辞書を完全に信じてしまったため、学習者に「私の辞書では全く逆です」と聞かれ、臨機応変に対応できず、指導教員の助けを求めた。このようなことから、すべての辞書を入手することは当然難しいが、手元にある辞書に存在する弱点や自分にさえ理解できない点があるところを常に意識しながら、より適切な説明を求めることが重要である。そして、準備したものを機械的に音読みする形になることを避けるために、学習者とのアイコンタクトをしながら、自分なりの解釈を加えたほうが効果的である。

また、学習者は全員漢字圏の人であり、漢字の意味を細かく説明しなくても通じると思ったため、それより詳しい説明をしなかった。しかし、同じ漢字圏であっても、すべての言葉が通じるわけではなく、具体的な用例を挙げないと区別できない類義語がたくさんある。例えば、「封鎖」と「閉鎖」について、学習者に「閉鎖」は「学級閉鎖」で、「封鎖」は「空港、道路などの交通機関」に使うと伝えたが、学習者がずっと意味にこだわっていたためか、クイズができなかった人も少なくなかった。

4. 4 時間の配分

練習問題3～8を60分の授業で終わらせなければならなかったので、時間の配分が難しいと考え、筆者はプランAとプランBを立てた。普段の指導教員の授業を見ると、練習8をしなかったこともあるので、プランAとして、時間が余ったら練習8を行うことにすることにして、時間がなければ、練習8を割愛しようと思っていた。教案どおりに、大体の時間配分がうまくできたが、細かい時間の配分について、教案に書いた予定より、不足したり超過したりした。例えば、練習5は上記のように、追加説明に大量の時間がかかってしまい、時間も大幅にオーバーしてしまった。

5. おわりに

今回の実習は初めての教壇体験であり、貴重な経験であった。加納先生のご指導の下で様々な勉強ができた。教案を見ながら授業を振り返ると、予想通り成功したところもあり、不安を抱えたところや、予想外のところで失敗したこともあるが、一人前の教師になるための不可欠な経験であると思う。これからもこれらの経験を活かし、自信を持って頑張りたいと思う。

総合日本語 2 における実習報告

周 暢

1. はじめに

本稿は、日本語教育研究コースの日本語教師養成プログラムの一環として 2014 年度の 3 学期に留学生センターで行われた日本語教育実習についての報告である。この実習を通して、一年間身につけてきた日本語教育に関する知識を実践に結びつけ、実際に日本語授業の運営に携わり、教師の役割を経験することはできた。本文は実習クラスの概要をまとめた上、実習の内容を記し、反省点及び感想について報告する。

2. 実習クラスの概要

表 1 実習クラス概要

担当教員	小野正樹先生
実習期間	2014 年 10 月—2015 年 1 月 合計 7 回
クラス	N202
教授の目的	基本的な文法、語彙及び会話力を身につけること
学習者	登録者 21 人 (多国籍)
教材	SFJ Lesson 9 - 16 /わくわく文法リスニング

3. 実習内容

表 2 実習内容

	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第七回
	11 月 10 日	11 月 17 日	12 月 8 日	12 月 22 日	1 月 5 日	1 月 20 日
実習時間	45 分	75 分	60 分	75 分	75 分	75 分
主要内容	L11 ロール プレイ	L12SD3 - 4 文法の説 明	L13SD1 - 3 文法の説 明	L14SD3 - 7 文法の説 明	L14 ロール プレイ	L15CD 会 話の練習

注：SD：文型練習である。主にその文型を説明し、学習者練習させる。

CD：ペアになってそのレッスンの場面に応じる会話を練習させる。

Role play：CD で学んだ会話を使ってペアでロールプレイをやる。

上記の N202 クラスにおいて先生方はチームで授業を行うため、開始前にスケジュールがあらかじめ決められており、実習の際はその日の授業目標を達成できるように、授業の準備をしてきた。また、本学期の中旬と期末にそれぞれ中間テストと期末テストを行われた。テストの内容は聴解テスト、文法テストと会話テストがあった。

学期の最初に、小野先生にこれからの実習内容と日付を決めていただき、スケジュールに基づいて、

毎回教案作りと教具などの準備をした。

実際教案を作る際、以下の3点を工夫した。

第一に、なるべく既習の単語を使うようにした。最初のSD練習で、学習者のレベルはうまく把握できなかったため、文法を説明するときに未習の単語を使ってしまい、学習者が理解できなかった。学習者にとって難しい単語や新単語は理解に支障を来すため、なるべく避けるべきだと考える。

第二に、目標言語（日本語）学習の環境づくりのため、媒介語（英語）の使用を必要最低限に抑えた。特に新出単語を教える場合、英語で説明するのは確かに効率的であるが、教師は別の表現で言い換えることにより、学生にとっては復習になるし、ヒアリングの練習にもなる。

第三に、導入方法を工夫した。文法を教える前に、「今日は〇〇を勉強します」というよりは、教師は实际生活の中で考えられる場面や会話から導入したほうが良いと考える。実生活に使われている文法だと理解でき、学習の動機が上がり、共感を覚えながら、自然に理解できるのではないかと思う。

4. 反省点

4. 1 教室の雰囲気づくり

N202の学生は活発で、積極的に授業に参加してくれたため、コミュニケーションはとりやすかった。だが、いつも後ろの席に座り授業中ずっと携帯をいじったり、おしゃべりしたりする学生がいた。授業に集中していない学生を注意することで、トラブルになる可能性もあり、授業の雰囲気を壊す恐れもあるため、注意していなかった。今後、授業に集中していない学生に対し、どう対応すればいいかについて考えていきたいと思う。

4. 2 フィードバック

授業中、学生へのフィードバックを工夫する必要があると小野先生からのコメントをいただいた。筆者は母語話者の言語直感を持っていないため、学生の誤りに即時に気づけないこともある。また、教師自身の誤用により学生に混乱を招く可能性があるため、教師自身も自分の発話に対し、常に注意すべきだと思う。これらかの教育実践で学習者の発話にフィードバックを正しくできるように、語彙量や文法知識、音声知識をたくさん蓄積しなければならない。

5. おわりに

今学期の教育実習で日本語教師が授業を運営することの大変さと大切さがわかった。今回の実習を通じて、貴重な経験が得られたと同時に、自分の未熟さも実感した。今後は、これらの知識と経験を教育現場に生かし、頑張りたいと思う。

実習にあたり、ご親切で丁寧なご指導をいただいた小野先生、協力していただいたTAの翟先輩、明るくて活発的なN202の学習者の皆さんに感謝の意を伝えたい。

総合日本語 3 における実習報告

沈 梅玲

1. はじめに

2014 年度秋学期、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究 I」の一環として、筑波大学の留学生センターで開講されている総合日本語 3 クラス (小野正樹先生担当) において、教育実習を行った。本稿では今回の実習について自分の感想および反省点を述べる。

2. 総合日本語 3 の概要及び実習内容

総合日本語 3 の概要は以下の通りである。

- ・目標：初級後期の学習者に簡単な日本語の読み書き、日常生活の会話力、及び日本語で簡単なスピーチをする能力を身に付けさせる
- ・教材：SFJ 改訂版 (学内使用) Lesson17-24/わくわく文法リスニング/NEJ Lesson17-21
- ・学習者：合計 20 人程度 (多国籍)
- ・日程：毎週水曜日 2 限 (10:10~11:25)

表 1 実習内容

一回目	実施日	10 月 29 日 (30 分程度)
	内容	SFJ L19 SD1-2 文型 [~ながら/V するつもり] の練習 将来の計画について会話を練習する 二つの動作を同時に行うことを表現する
二回目	実施日	11 月 19 日
	内容	SFJ L20 CD1-2 人に話しかける表現の練習/上下関係による依頼表現の練習
三回目	実施日	12 月 10 日
	内容	SFJ L21 SD9-12 わくわく 79・80 [V-辞書形/ない形-ない]+ように [V 可能形-れる/られる]+ように 指示語「あの」「あれ」と「その」「それ」の文脈指示用法
四回目	実施日	12 月 24 日
	内容	SFJ L22 SD6-8 わくわく 84 [させていただく]「V て形+てしまう/V て形+ちゃう」 「させてください」と「てください」の使い分け練習
五回目	実施日	1 月 14 日
	内容	SFJ L23 SD9-11 わくわく 93 [~ているところなんです] [V 辞書形+ために] [名詞+の+ために]

		「ように」と「ために」の使い分け練習
六回目	実施日	1月28日
	内容	SFJ L24 CD 旅行の相談において、提案、賛成、反論、同意を求めるなどの会話練習

3. 実習感想及び反省

3. 1 漢語の提示

初級学習者、特に非漢字圏の初級学習者への漢字の教え方は難しい課題である。また、授業中に説明などのために漢語提示が必要になる場合が出てくるが、その際使用する漢語の難易度なども考えなければならない。筆者は一回目の実習で新しい文型を導入した時、初級学習者にとってまだ難しい漢語「計画」を使って例文を作ったが、学習者がその漢語の意味が分からなくて文型の理解への妨げになったと思われる。初級段階の学習者に漢語を提示する際、常にその漢語の難易度に心掛ける必要があると実感した。

3. 2 自由練習の工夫

総合日本語 3 のクラスではペアによる文型ドリルが多かった。『SFJ』では新しい文型の習得のために、多くの練習問題が設けられている。筆者は実習はじめの頃は、ほとんど教科書の内容に沿って教えていたが、小野先生から意見をいただき、学習者に主体的に、自分で見つけた語彙を取り組む自由練習や応用練習をさせることも重要だと考えるようになった。このような自由練習は学習者が持っている知識を引き出し活かせることによって彼らのモチベーションを向上させることができるのではないかと思う。また、学習者が自由練習に新しい文型を正しく取り入れているかどうか、教師側が確認することも重要である。

3. 3 学習者の集中度

今回の実習で、筆者が教壇に立って教えていた時、学習者たちが普通の授業と違い、集中度が足りないとよく感じた。学習者たちには、授業中勝手に私語を始める傾向が見られた。学習者の集中度が足りないのは自分が実習の先生として威信がないからであることも考えられるが、やはり授業の内容の面白さ、また授業中学習者たちとのコミュニケーションが欠けていたと思う。これは今後の課題として解決していきたい。

4. おわりに

今回の実習を通じて、初めて教壇に立って日本語教師の役割を経験し、自分が日本語教師になるために不足している点に深く気付いた。また、教師の視点から日本語を見ることができて、学習者にどのように分かりやすく説明するかいろいろ考えさせられた。今後は今回取り組んだ成果と反省を活かし、4月からの教育実践研究Ⅱでさらに効果的な授業を実践していきたい。最後に、実習で丁寧にご指導くださった小野正樹先生とクラスの学生達に、心からお礼を申し上げたい。

G30 日本語 1 における実習報告 (1)

姜 虹宇

1. はじめに

筑波大学人文社会科学研究所国際地域研究専攻日本語教育研究コースの必修科目として、2014 年度秋学期に G30 初級日本語 1 クラスで、見学及び教育実習を行った。本稿では、実習クラスの概要をまとめた上で、実習の内容を記し、感想及び反省点を報告する。

2. 実習概要

担当教員	ブッシュネル・ケード先生
授業期間	秋学期 (15 週) A, B モジュール (10 週) C モジュール (5 週)
担当クラス	G30 初級日本語 1 クラス 毎週月曜日 3 限目
教科書	G30 日本語用教材
受講者	登録者 13 名 (多国籍)
授業目的	基本的な文法、語彙及び日常的な会話能力を身につけること。

3. 授業及び実習内容

A, B モジュールは、基本的に教科書に沿いながら、ユニットごとに、基本的な文法と文型の説明、ドリル、応用練習のタスクという順番で授業が進められた。モジュール C では主に、学習者が主体となり、それぞれの興味やニーズに合わせてながら、A, B モジュールで学んだことを応用させる活動が行われた。授業のカリキュラムとシラバスは、授業開始前に既に決まっていた。筆者はそれらに従って授業の準備をし、実習を行った。

授業の見学は毎週行った。実習は 2 コマ (1 コマ 75 分) を担当した。実習では、主に学習者の学んだ語彙や文型を会話に応用するタスクを担当した。担当した授業の流れは、以下の通りである。

- ① タスクに入る前の準備：挨拶や学習者の経験を出発点として、PPT の写真などを利用し、文型や語彙の復習を行った。
- ② タスクの導入：タスクの内容と関連づけるモデル会話と音声ビデオを見聞きさせた。
新しい語彙や文型の提示もこの段階で行い、独自でタスクが完成できるように工夫した。
- ③ タスクの実施：グループワークの形で、タスクを完成させた。
- ④ タスクの発表：グループごとに発表し、フィードバックを与えた。

4. 実習の感想と反省点

筆者は、2014 年 11 月 10 日に教壇に立ち、教育実習を行った。初めて授業を担当したため、問題が多発した。ここでは、録画した授業のビデオを見て気付いた反省点と、ブッシュネル先生からご指摘いただいた点について述べたい。

4. 1 授業前の準備

授業前の準備といえば、教材研究を通じて知識を深めるだけでなく、その知識を伝える心の準備をすることや、授業内で起こり得るトラブルを想定し、それに対応するための準備をしておくことも重要であると実感した。初回の実習では、パソコンの接続など予想外の機械のトラブルが起き、対応するのに時間がかかってしまった。その際、筆者は焦ってしまい、教案通りに授業を進めるために、予定していた活動を駆け足で行ってしまった。このことから、トラブルが起きた際は、その場で冷静に対応することと、そのための心の準備が必要だと痛感した。一つの解決策として、授業前に十分なりハーサルをすることで、緊張感の緩和や予想外のトラブルをある程度避けられるのではないかと考えている。

4. 2 授業中のフィードバック

学習者の発話や質問に対して適切なフィードバックや訂正をすることの大切さを実感した。特に、初級段階では、訂正が不十分であると、誤った言語知識がそのまま定着してしまう可能性がある。そのため、実習ではこの点に特に注意した。しかし、訂正やフィードバックをどのように、どのタイミングで与えると効果的であるのかを知ることは、容易ではない。教師の瞬時の判断力と、積み重ねた経験が必要だと考えられる。

実習を振り返って、学習者個々の練習やグループ発表した際、学習者の答えに出てきた難しい言葉を他の学生が知らないと予測できた際、「いいですね、素晴らしい」などの評価より、他の学習者も注目するよう、「～さんが言った～がどういう意味ですか」などと言うと、学習者に考えるチャンスを与え、記憶に残させる効果があるのではないかと考えられる。教師として柔軟に対応すること及びその判断力を培うことの大切さが、今回の実習を通して大変いい勉強になったことである。

4. 3 言語能力の問題

G30 初級クラスでは学習者のニーズに合わせるため、授業中に媒介語の英語を使わなければならない。筆者は英語の母語話者でないため、授業中に面白いことを思いついた際に、うまく英語で伝えられないことがあった。また、複雑な文の意味を一つの英単語で表現できると気づいているのに、その英単語がなかなか思い出せず、悔しい経験もした。日本語の使用においても、日本語母語話者のような直感を持たないため、学習者の誤りを即時に気づかないこともあり、間違ったことばを定着させてしまう危険性もある。以上のことから、日本語力と英語力をさらに磨いていかなければならないと感じている。

5. おわりに

本稿は、G30 日本語初級 1 クラスにおける教育実習を報告した。今回の実習は、筆者にとって日本語教師としての第一歩を踏み出すことのできた貴重な経験であった。一人前の教師になるまでの長い道において、いろいろと試行錯誤しながら日本語教育現場で経験を積んでいかなければ、今回の実習を通して、貴重な経験が得られたと同時に、自分の未熟さにも気付くことができた。これからも、責任感を持ちつつ、いい教師になることを目指して頑張りたい。最後に、実習において丁寧にご指導くださった担当教員のブッシュネル先生に、心からお礼を申し上げたい。

G30 日本語 1 における実習報告 (2)

萩原 宥子

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは、英語で行われる授業のみで学位を取得する G30 プログラムの留学生のために、日常生活会話レベルの日本語を「聞く・話す」ことに重点をおいた、専用のコースを設けている。筆者は、同大学院人文社会科学部国際地域研究専攻日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究 I」の一環として、ブッシュネル・ケード先生が担当されていた「日本語 1」にて日本語教育実習を行った。本稿では、授業を担当して学んだ点の中から、特にタスク活動の導入方法に焦点を当てて記述する。

2. 実習の概要

「日本語 1」は平成 26 年度秋学期 AB モジュールに、入門レベルの学習者約 13 名を対象として、75 分の授業が週 3 回行われた。筆者は学期開始時から週 1 回のペースで授業に参加した。この授業ではタスク集を用いた活動(会話作り)が主軸に置かれており、ペアやグループでタスク活動を行いながら、必要な語彙や文型を覚えていく形式であったため、まずは学生が作った会話文の表現をチェックするところから始め、少しずつ交流を深めた。授業は全 2 回担当したが、1 回目を行う時期には、学生ひとりひとりの日本語レベルや発音特徴をある程度把握できていた。また、実習は【教案提出→コメントをふまえ修正→実践→先生との反省会→録画確認/自己反省】という流れで進めた。

以下が 2 回の授業のおおまかな流れである。

表 1 授業の流れ

1 回目	あいさつ	「最近学園祭がありましたね、みなさん参加しましたか？」	
	復習	(動詞語彙の復習)「絵を見ました」「買い物をしました」	
	導入①	「私はそこ(学園祭)で新しい友達ができました」自己紹介の実演	
	タスク①	新しいクラスで、クラスメイト全員に対して自己紹介をする	1-①
2 回目	導入②	「では次をやってみましょう」	
	タスク②	パーティーのホストとして、ゲストの所属や国籍などの情報を担当者に伝える	1-②
	あいさつ	「先週美容院に行きました」	
	練習	美容院/病院、箸/橋の聞き取り練習	
2 回目	導入①	「私は先週末美容院に行きました」「ブッシュネル先生はジョギングをしました」例を挙げる	
	タスク①	久しぶりに会った友人に、先週末何をしたのかを聞く	2-①
	導入②	「日曜日に友達にメールしました」メールのやりとりを例として PPT で提示	
	タスク②	先週末をしたか、家族や親しい人に宛ててメールを書く	2-②

3. タスクの導入方法

G30 コースの学生は授業を日本語で受ける必要がないため、4年間の大学生活を日本で送るための、いわばサバイバルジャパニーズを身につけることが求められている。そのため、この授業でのタスク活動は、単純に会話作りをさせるのではなく、会話場面を「実際に自分の身に起こりうる状況である」ということを意識・実感させながら、自身の背景に合わせたオリジナル会話を作成させることが重要である。このように、タスク活動を通して、＜授業後に教室の外に出ればすぐに使える表現を身につけさせること＞を、今回の実習の目標として設定した。

実習を通して、この目標を達成するためには、タスク活動をどのように開始するのか、その導入方法が非常に重要な要素となることがわかった。例えば、「次はP. 3のタスクをしましょう。はい、始めてください」というように、教師がタスク活動を機械的に始めてしまうと、学習者のタスクへの取り組み方も機械的になりがちであり、それでは進出の語彙や表現の定着に繋がりにくい。実習1回目の表1の1-②ではまさにそのようなことが起こってしまった。直前の1-①のタスクとの関連性もなく、会話の例を挙げることもしなかったため、学習者の会話作りを作業化させてしまい、せっかくのタスクが単純な作文に終わってしまった。また、学習者がタスクの指示を理解する時間が余計にかかってしまい、結果、グループごとの発表内容も噛み合わなかった。さらにこのことの弊害として、学習者の発表に対して効果的なフィードバックができず、学習者もこのタスク活動について充実感が得られぬものとなってしまったように思う。先生との反省会でも、指示内容がわかりにくかったことが改善点として挙げられ、PPTを効果的に用いて、例を示すことを次回の方略とした。

この反省を活かし、実習2回目の2-①、2-②では、1コマ分の授業の流れをしっかりと作り、授業冒頭のあいさつ、練習、タスク①、タスク②の話題を「先週末行ったこと」に統一することで、学習者の指示理解を促進した。また、例を何パターンか示すことで学習者のスキーマを活性化させ、ペアワークやグループワークでの話し合いを活発化させることができた。結果として、語彙や表現に対する質問も多く飛び交い、教師からの新たなインプット・学習者のアウトプットの量が増加した。また、会話文の発表についても質が高いものが目立ち、ひとつひとつのグループに対するフィードバック、全体に対するフィードバックも、どこがよかったか、どこが間違っていたか、学習者と会話する形で進めていくことができた。

4. おわりに

「教案通りに進める必要はありません。教案をスタート地点として学生とく遊ぶ＞ことが大事です。これは初めて教案を先生に見せた際にブッシュネル先生が仰った、非常に印象深い一言である。筆者は実習をスタートするまでに国内外で2年間非常勤講師として勤務した経験があったが、このような自由度の高い形式での授業を行ったのは初めてであった。もちろん、日本語教育現場では「カリキュラム通り（＝教案通り）に授業を進めること」は非常に重要である。しかし、今回の実習を通して、重要なのは「作り込まれた教案のセリフを台本としてそのまま演じる」ということではなく、「教案をシミュレーションの道具、またはペース配分の目標として用い、実際の授業では学習者の反応に合わせて柔軟に対応すること」であると気づき、それが先生の仰ったく遊ぶ＞ことであると理解できた。

最後に、教案作成や授業に対するフィードバックを通して丁寧にご指導して下さったブッシュネル先生に、ここで厚く感謝を申し上げます。

G30 日本語 1 における実習報告 (3)

屋名池 明

1. はじめに

本稿は、日本語教育研究コースの必修科目「日本語教育実践研究Ⅰ」の一環として、平成 26 年度秋学期に G30 日本語 1 において筆者が行った実習の報告である。以下において、まず、実習を行ったクラスの概要と実習の内容を示す。その後、実習の反省を述べたい。

2. クラスの概要と実習の内容

まず、筆者が実習を行ったクラスの概要を表 1 に示す。

表 1 クラスの概要

期間	平成 26 年度秋学期
クラス	G30 日本語 1
学習者	G30 の学生 13 人
担当教員	ブッシュネル・ケード先生

上記のクラスにおいて、筆者は 2 回実習を行った。以下、それらの概要を表 2 に示す。

表 2 実習の概要

	1 回目	2 回目
実習日時	2014 年 12 月 5 日 (金) 4 限目	2014 年 12 月 12 日 (金) 4 限目
担当内容	G30 日本語用教材 Unit 2 49~50 頁	G30 日本語用教材 Unit 2 56~57 頁
使用教材	G30 日本語用教材 リスニング用自作教材	G30 日本語用教材 リスニング用自作教材
授業内容	1) 宿題の確認 2) リスニング活動 3) アプリケーション活動 4) リスニング活動 5) アプリケーション活動	1) アプリケーションの発表 2) リスニング活動 3) アプリケーション活動 4) リスニング活動 5) アプリケーション活動

授業の内容について述べたい。1 回目の実習では、まず、宿題であったメール作文を複数の学習者に読んでもらった。他の学習者には、発表者のメールの内容について質問し、理解できたかどうか確認した。その後、後に行うアプリケーション活動の導入を兼ねて、リスニング活動を行った。プリントを配付し、新出語彙の説明を行った後、リスニングを行った。1 回目は内容を理解するよう指示し、

2 回目はプリントに示されている質問の答えを聴き取るよう指示した。その後、学習者の解答を確認した。リスニング活動の後には、アプリケーション活動を行った。これは、設定された場面について、ペア (もしくは 3 人) で会話を作るという活動である。会話を作った後には、発表の時間を設けた。その際、発表を聞いていた学習者には会話の内容について質問し、理解できたかどうか確認した。その後は、先述の手順でリスニング活動とアプリケーション活動をもう 1 回行った。

2 回目の実習も、授業の冒頭で行ったアプリケーション活動の発表以外は、1 回目と同様の手順で授業を進めた。そのため、ここでは 2 回目の授業内容の記述を割愛する。なお、授業の始めに行ったアプリケーション活動の発表とは、この授業の 1 つ前の授業において、時間が足らずアプリケーション活動の発表ができなかったグループが、その発表を行ったものである。

3. 実習の反省

まず、1 回目の実習の反省を述べる。評価できる点としては、授業中における身体の使い方や話し方が挙げられる。学習者から、授業中ジェスチャーを使いながら明瞭な話し方ができていたというフィード・バックを得たからである。改善すべき点としては、ウォーム・アップを兼ねた授業の冒頭で行った活動が挙げられる。授業の始めに、宿題であったメール作文を読み上げさせたが、他の学習者は殆んど聞いているだけであったため、ウォーム・アップにととしては不適切であったからである。また、アプリケーション活動においては、発表のための時間があまり残らず、全てのグループに発表してもらった時間がなかった。学習者が少しの緊張感をもって活動に取り込むためにも、できる限り学習者全員に発表する機会を与えるべきだと感じた。さらに、板書についても改善すべき点がある。授業中、学習者から質問があり語彙を教えた際、口頭で伝えるのみで、板書はしなかった。しかし、板書をすれば、聞き取れなかった学習者がメモをとることができたり、視覚に訴えることができたりするため、新出語彙は、適宜、板書すべきだと感じた。

2 回目の実習では、1 回目の授業において問題であった点が改善された。まず、アプリケーション活動の進め方が改善された。1 回目の実習では時間が足りなくなってしまい、学習者に発表させる時間が少ししか残らなかったが、今回の授業では時間配分が上手くいった。また、1 回目の実習では学習者から質問のあった新出語彙を口頭で伝えるのみであったが、今回は、全ての新出語彙ではないが、必要に応じて板書することができた。この点も、1 回目の実習から改善されたため、評価できよう。

4. おわりに

筆者が英語を用いた間接法を使って授業を行ったのは、この実習が初めてだった。実習前は、外国語教育は直説法で行われるべきだという考えを持っていた。しかし、指導教員であるブッシュネル・ケード先生の授業を観察することや、実際に間接法で授業を行うことを通して、媒介語を用いると効率的に学習者に指示が与えられるため、初級クラスにおいては間接法の使用は非常に有効であるということに気付いた。このように、間接法を実際に使い、その利点を直に感じることもできたことは、今回の実習における大きな収穫だったといえる。